



1. 議論の背景と現状の課題

従来の「地域交流」や「校外活動」における形式的な取り組みに対し、現場の負担や実効性の観点から、以下のような課題が投げかけられた。

- ・ 校外移動の負担と学区の特殊性
児童生徒が校外へ移動すること自体の負担が非常に大きい。また、特別支援学校の特性上、学校の所在地と児童生徒の居住地（学区）が必ずしも一致しないため、一般的な学校のように「地元の地域」に限定した繋がりを作ることは構造的な難しさがある。
- ・ 形骸化した交流への疑問
「去年もやったから」「とりあえず他校と合わせればいい」といった前例踏襲の交流や、一時的なイベントで終わる交流では、児童生徒の卒業後に繋がる確実な関係性が築けない（1ミリも残らない）。
- ・ 方向性の転換
外へ無理に出るのではなく、「校内でいかに豊かな交流を生み出すか」、そして単発ではなく「小学部から高等部・卒業後まで継続して積み上げていけるテーマ（サイクル）をどう作るか」へと議論の軸足が移された。

2. 熟議における具体的なアイデアと提案

課題解決に向け、「五感への刺激」「大学との連携」「全員参加のビッグイベント」を軸に、3つの具体的なアプローチが提案された。

① アート・音楽を通じた「アートサイクル」の構築

子どもたちの成長において、目と耳で「五感」に刺激を与える学びは絶対的な意義を持つという視点から、アート中心の校内誘致型イベントが提案された。

〈アーティストの誘致と発信〉

外部のアーティストやミュージシャンを学校に招き、その表現の「衝動」を子どもたちに間近で体現してもらう。学校側がその活動を広く発信（札幌市全体、ひいては全国へ）することで、アーティスト側にもメリットが生まれ、持続可能な雇用やボランティアの循環（アートサイクル）に繋げる。

〈校内モザイクアート制作〉

児童生徒が体験を通じて描いた絵や撮影した写真をパーツとし、先生方が割り振った色（青、緑、赤など）ごとに集めて、学校全体で一つの巨大なキャラクターや建物のモザイクアートを作り上げる。これを毎年積み上げていくことで、学校独自のストーリーを地域へ発信する。

② 大学・学生との対等な連携（「ボッチャ」の提案）

大学側から「学生が学校のために何ができるか」という窓口（授業やボランティアサークル）があることを受け、単なる「子どもの面倒を見るボッチャのボランティア」ではない、新しい連携の形が模索された。

〈双方にとって初めての体験としての「ボッチャ大会」〉

大学生も生徒も同じスタートラインで体験を共有することで、「障害のある子とはどういう子どもなのか」「ボッチャとは何なのか」を大学生側が主体的に学ぶ機会とする。学生を単なる「ゲスト」として巻き込む仕組みが有効であるとされた。

③ 大人も子どもも全力で楽しむ「ギネスチャレンジ」

学校に関わる大人（教員、保護者、地域）が子どもと同じ目線に立ち、全員で楽しめる象徴的なイベントとして、「世界一長い海苔巻き作り（ギネスチャレンジ／自称世界一でも可）」が提案された。

駐車場などの校内スペースを使い、お米を炊くところから大学生や地域住民（町内会等）と一緒に取り組み、全員で一つの目標を達成する。この体験を通じて「自分も世界一の海苔巻きを作ったんだ」という共通の価値観や思い出を地域に生み出し、毎年の恒例行事として定着させる。

3. 他校での成功事例の共有

議論の中では、過去の有効なアプローチとして、他校における高等部と近隣高校の生徒会との継続的な連携事例が紹介された。

- ① 卒業式の合同合唱：テスト期間等で直接の来校が難しい時期を見計らい、同じ曲をそれぞれの学校で練習。卒業式当日に合同合唱団として一緒に歌う取組。

②広報誌の共同編集: 双方の行事の様子を載せる合同通信を発行。他校の生徒会が編集し、本校の生徒がイラストを描くなどの役割分担を行い、コロナ禍のオンライン環境下でも息の長い交流として機能した。

4. 今後の展望とアクションプラン（柱の確立）

グループ B としての最終的なまとめとして、「1つの強固な柱を作り、そこに様々な活動を付随させていく」という方針が確認されました。教員の新たな負担を増やさず、12年間の学校生活（小学部・中学部・高等部）を通じて段階的に発展できる「ストーリー」が重視される。

すぐできること（校内）：日常的な生活（地域の買い物など）をベースとしつつ、まずは校内で完結するアートや写真の収集など、負担の少ないアクションから着手する。

巻き込み型への展開：集まった作品をモザイクアートなどの形にして発信し、徐々に大学生や地域住民を巻き込む。

最終的な目標：「小学部であれを経験したから、中学部ではこれができる、高等部ではライブができる」といった共通のイメージを全校（教員・児童生徒）で共有し、最終的にはギネス挑戦のような、地域全体を巻き込んで大人も子どもも笑顔になれるビッグイベントへと昇華させていく。

【結論】

義務感で行う形だけの交流を排除し、「子どもたちの五感を刺激する継続的なアート活動」と、「地域や大学を巻き込んで大人も子どもも対等に楽しむビッグイベント（海苔巻き等）」の2つを軸に、校内発信型の持続可能なコミュニティづくりを目指していくべきである、という極めて建設的な熟議が行われた。